教　育　史　学　会

第57回大会プログラム

２０１３年１０月１３日（日）～１４日（月）

福岡大学

教育史学会第57回大会　参加のご案内

大会参加費・懇親会費

第 57 回大会では、院生会員の大会参加費を無料とします。また、会員でない学生の参加費・懇親会費は特別料金とします。確認のため学生証をお持ちください。

大会参加費、懇親会費

	一般会員・臨時会員	院生会員	臨時学生会員
大会参加費	3000 円	なし	1000 円
懇親会費	4000 円	2000 円	3000 円

受付

大会参加の受付は、A 棟 7 階の奥の通路で行います。詳細は 7 ページをご参照ください。7 階には受付、クローク、会員控室があります。

受付で大会参加費をお支払いください。『発表要綱集録』と名札（未記入）等をお渡しいたしますので、名札にご所属とお名前の記入をお願い致します。懇親会への参加も受け付けいたします。

学会年会費の納入は、学会事務局の受付で行います。

シンポジウム（公開）

シンポジウムのテーマは、「大学の歴史を大学教育の視点から振り返る」です。公開シンポジウムですので、会員以外の方も無料で参加できます。会場は、A 棟 4 階にある A401 教室です。会場の詳細は、6～7 ページをご参照ください。

研究発表・コロキウム

個人発表会場、コロキウム会場はともに 6 階です。

① 研究発表時間は、一人あたり 30 分（研究発表 25 分、質疑 5 分）です。
② 発表内容は未発表の研究に限ります。
③ 発表者が欠席の場合、発表時間の繰り上げは行いません。また、発表者が遅刻の場合は、発表資格を失います。ご注意ください。
④ 発表に関わるレジュメ、資料などを会場で配布される場合、十分な部数をご用意ください。大会準備委員会では、印刷・増刷に応じられません。
⑤ 当日資料の残部は、会員控室に置いておきますのでご自由にお取りください。尚、残りました資料は大会事務局扱いと致しますのでご了承ください。
⑥ 本大会では、コロキウムのいっそうの充実を図るため、正規の時間帯に組み込み、時間も長めに確保してあります。ふるってご参加ください。

懇親会

10 月 13 日（日）のシンポジウム終了後、18 時 00 分より学生食堂「陽だまり」で懇親会を開催いたします。懇親会費は、1 ページの「大会参加費、懇親会費」をご参照ください。多くの皆様のご参加をお

待ちしています。

販売

6 階では、書店による図書の販売等があります。積極的なご利用をお願い致します。

昼食

10 月 13 日（日）、14 日（月）ともに、学生食堂「陽だまり」に営業して頂きます。積極的なご利用をお願い致します。

会場までのアクセス

大学構内に駐車場の用意はありません。なるべく公共の交通機関をご利用ください。駐車場が必要な方は、福岡大学病院の駐車場（最初の 4 時間 200 円）をご利用ください。

宿泊

各自での手配をお願い致します。大会準備委員会による斡旋は行いませんのでご了承ください。

託児サービス

本大会では託児は行いません。

問い合せ先

教育史学会　第 57 回大会準備委員会　事務局
〒814-0180 福岡市城南区七隈八丁目 19-1
福岡大学人文学部　　勝山研究室
Tel：092-871-6631（内 3812）Fax：092-871-6654（人文学部事務室）
E-mail：educationhistory2013@yahoo.co.jp
Homepage：http://educationhistory.org/

教育史学会　第 57 回大会準備事務局

委員長　勝山吉章　事務局長　高橋潤子

タイムスケジュール

	2013年10月13日（日）	2013年10月14日（月）	
8:15	受付 （A棟7階奥の教室前通路　）	受付 （A棟7階奥の教室前通路　）	8:15
9:00	研究発表 （A棟6階 603・609・610・616・617教室）	研究発表 （A棟6階 603・615・616・617教室）	9:00
11:30		昼休み （新理事会　A棟7階707教室）	11:30
12:00	昼休み		12:30
13:00	総会 （A401教室）	研究発表 （A棟6階 603・615・616・617教室）	
14:00			
14:10	休憩		
15：00	シンポジウム （A401教室）		15：00
15：10		移動	15：10
17：30		コロキウム （A棟6階 602・603・615・616教室）	17：30
17:45	移動		
18:00	懇親会 （陽だまり）		
20:00			

※10月12日（土）に理事会、機関誌編集委員会が文系センター16階で行われます。
※10月13日（日）に書評委員会がA棟7階のA714教室で行われます。

交通案内図

福岡大学へのアクセス　：http://www.fukuoka-u.ac.jp/help/map/

早くて便利な地下鉄をご利用ください。

福岡空港、新幹線博多駅から地下鉄ご利用の場合：所要時間約１時間（乗り換え時間を含む）

地下鉄「福岡空港駅」および地下鉄「博多駅」から地下鉄空港線にて「天神駅」下車。「天神地下街」をてくてく歩いて（約 15 分）地下鉄七隈線の「天神南駅」へ。「天神南駅」から「福大前駅」まで乗車。「福大前駅」の改札左側の①番出口を出て地上に出る。そこから約 15 メートル直進して左手に正門。

※地下鉄「天神駅」から地下鉄「天神南駅」へは、特別の改札機（緑の改札機）を利用してください。そうしないと割引料金となりません。両駅は、地下街の活性化のために結合されていません。

※お帰りの際、地下鉄「天神駅」から博多駅や福岡空港に向かわれるとき、地下鉄空港線は、「中洲川端駅」で貝塚方面「箱崎線」と分かれます。貝塚方面の車両にはご乗車されないでください。

高速バスご利用の場合：

博多駅到着の場合は、福岡空港、新幹線ご利用の場合と同様に、地下鉄空港線～地下鉄七隈線に乗り換えてください。天神バスセンター到着の場合は、「天神南駅」より地下鉄七隈線にご乗車ください。

西鉄バスご利用の場合：

①博多駅バスターミナル1Fから、12番、114番
博多駅前から16番　　所要時間どちらも約50分
②天神周辺から、12番、14番、114番、140番　所要時間約40分

タクシーご利用の場合：

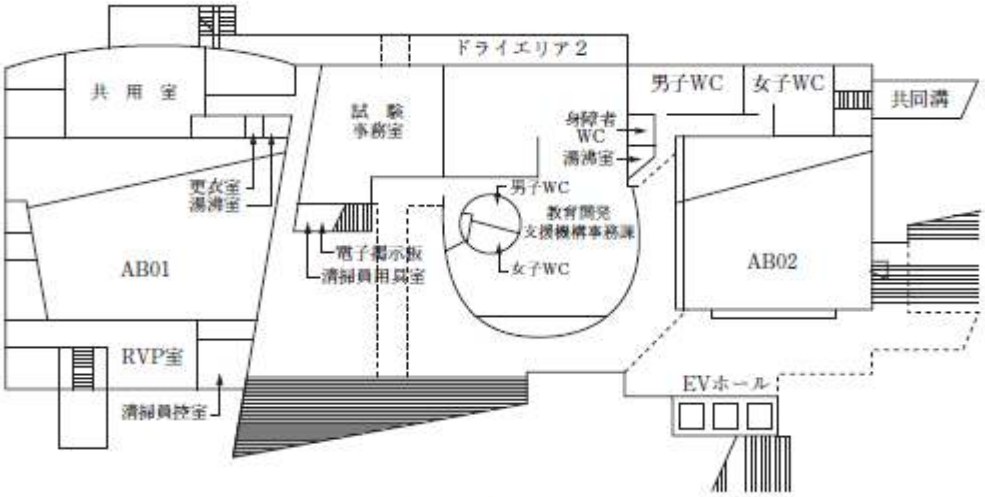
福岡空港からは所要時間30~40分で、4,700円ぐらいです（都市高速利用）。
新幹線博多駅からは所要時間45分で、3,200円ぐらいです（一般道使用）。
ご利用の際は、南部タクシー（092-871-2386）が便利です。

※福岡の地下鉄、西鉄バス、国鉄（JR）ではSUICA等が使用できます。
※お車でお越しの際は、大学病院の駐車場をご利用ください。（有料：最初の4時間200円）

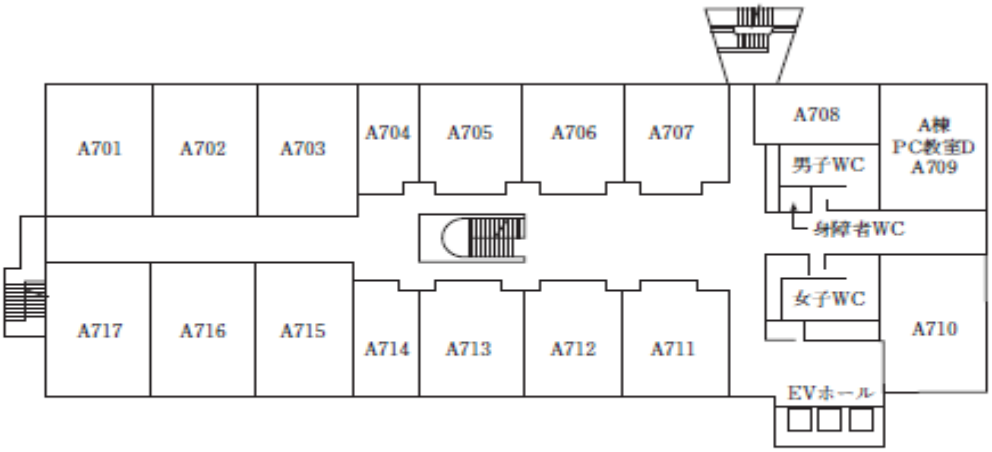
構内案内図

会場　A棟　7階（受付・クローク・会員控室）
6階（個人発表・コロキウム会場・書籍販売等）
4階（総会・シンポジウム会場）

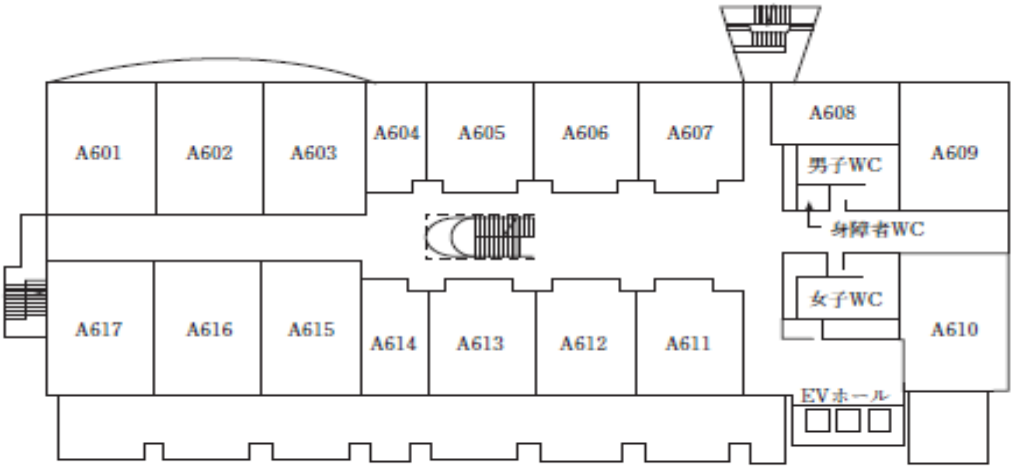
会場案内図



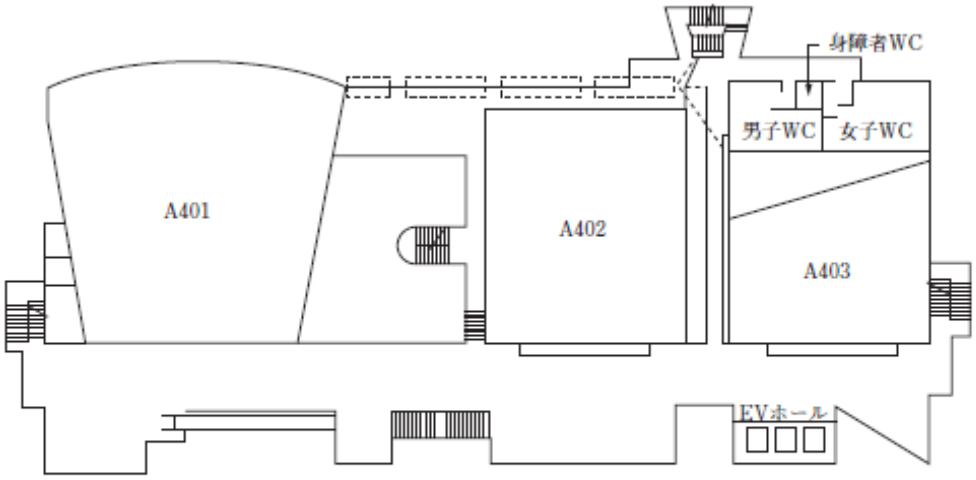
地下１階



７　階


A601
A602
A603
A604
A605
A606
A607
A608
男子WC
A609
身障者WC
女子WC
A610
A617
A616
A615
A614
A613
A612
A611
EVホール

6　階


身障者WC
男子WC
女子WC
A401
A402
A403
EVホール

4　階

― シンポジウム ―

テーマ「大学の歴史を大学教育の視点から振り返る」

日時：2013 年 10 月 13 日（日）14：00～17:45

場所：福岡大学「A 棟」401 講義棟

報　告　者：　井ノ口淳三会員（追手門学院大学）
　　渡辺かよ子会員（愛知淑徳大学）
　　中村　勝美会員（広島女学院大学）
指定討論者：別府　昭郎会員（明治大学）
　　湯川　次義会員（早稲田大学）
司　会　者：船寄　俊雄会員（神戸大学）
　　松本　和寿会員（筑紫女学園大学）

テーマ設定の趣旨：

教育史学会は、2011 年 10 月の第 55 回大会において「教育史研究における大学史研究の位置」と題するシンポジウムを行った。そのなかで、大学史研究は教育史研究、否、歴史学研究そのもののなかでどのような意義を有するのか、また大学史編纂がいかなる価値を生ぜしめるのかについて有益な論議が繰り広げられた。

ただ、教育学研究のなかで大学史を論じるにあたり、大学教育とその担い手である教育者（教授等）について歴史的に考察することが課題として残されたといえる。

いま国際社会は、高等教育の大衆化のなかで、ボローニャ・プロセスにみられる大学教育の標準化による質の向上と、そのなかで指摘されたディプローム（ディグリー）・ミルなど学位のばらまきが論議されている。グローバル化と科学技術の進展にみあった大学教育の高度化への要求と、大学の大衆化に伴う大学教育の質の低下の狭間にあって、大学がそのレゾンデートルをどこに見い出すかで苦悩していると言えよう。

もはやマス段階を越えてユニバーサル・アクセス段階に突入したわが国の大学も、産業界などからグローバル化社会でのリーダーとなり得る高度な人材育成が求められ、そのための大学教育の質の向上が問われている（日本経団連「グローバル人材の育成に向けた提言」2011.6.14.）。「大学教育の見直し」などを選挙公約にかかげて政権政党に返り咲いた自民党は、教育再生実行本部を立ち上げ「大学教育の強化分科会」（座長：山谷えり子）を設けた。同分科会では「大学教育の質の保証徹底の義務化」が唱えられている（「中間取りまとめ」2012 年 11 月 21 日）。高度な人材育成のための大学教育の質の向上が叫ばれる一方で、リメディアル教育にみられる中等教育の補完、やり直しなどの必然性に迫られている大学も多い。

明治期以降、ヨーロッパ型（特にドイツのフンボルト理念に基づくエリート向け）研究大学、アメリカ型の実学・教養大学の両方の機能を併せ持ってきた日本の大学は、４６答申や臨教審などによって、研究専門の大学、高度職業人養成の大学、一般教養教育の大学といった三類系に分化すべきことを論じられてきた。そして設置基準の大綱化（1991 年）や大学院重点化によって、この三類系を基礎とする大学のヒエラルヒーが強化され、大学院大学への傾倒化と教養教育の軽視が見られる事態となっている。だが、今日こそ、被教育者（学生）にとって教養教育が重要な時はないだろう。日本経団連も、先の提言のなかで、グローバル人材を育成するために真っ先に重要なのは、「リベラル・アーツ教育の拡充」と訴えている。

そもそも専門教育と教養教育は相反するものなのであろうか。いな、大学教育は歴史的にどのように考えられてきたのだろうか。そして大学教育は何を理想としてきたのであろうか。そして大学教育を担う教授は如何にあるべきとされてきたのだろうか。本シンポジウムでは、これらの議論を教育史の視点から根本的に問うてみたい。

そこで、コメニウスの大学教育論、日本の大学における大学教育論、イギリスの大学教育論をそれぞれ歴史的に振り返ることによって、大学教育の在り方、大学教授のあり方について考察を深めていきたい。

＜報告者プロフィール＞

井ノ口淳三(いのくち・じゅんぞう)

追手門学院大学教授。博士(教育学)。著書に『コメニウス教育学の研究』(ミネルヴァ書房、1998 年)。『命の教育、心の教育は何をめざすか』(晃洋書房、2005 年)。編著に『道徳教育』(学文社、2007 年)。共著に『教師を育てる―大学教職課程の授業研究』(阪神教協編、ナカニシヤ出版、2010 年)。『学力を育てる教育学[第 2 版]』(田中耕治と共編、八千代出版、2013 年)。翻訳書にコメニウス『世界図絵』(平凡社、1995 年)など。

渡辺かよ子(わたなべ・かよこ)

愛知淑徳大学文学部教授。Ph.D. 単著に『近現代日本の教養論:1930 年代を中心に』(行路社、1997 年)、『メンタリング・プログラム:地域・企業・学校の連携による 次世代育成』(川島書店、2009 年)、共著に『教養の思想:その再評価から新たなアプローチへ』(河合栄治郎研究会編、社会思想社、2002 年)、翻訳書に『大学論: アメリカ、イギリス、ドイツ』(坂本辰朗・羽田積男・犬塚典子との共訳、玉川大学出版部 2005 年)など。

中村勝美（なかむら・かつみ）

広島女学院大学、人間生活学部准教授。教育学修士。共著に『ネイションとナショナリズムの教育社会史』（望田幸男・橋本伸也編、昭和堂、2004 年）、『西洋の教育の歴史を知る―子どもと教師と学校をみつめて』（勝山吉章編著、あいり出版、2011 年）、『子ども学のすすめ』（西九州大学子ども学研究会編、佐賀新聞社、2012 年）、共訳書にヤーラオシュ編『高等教育の変貌 1860-1930―拡張・多様化・機会開放・専門職化』（望田幸男・安原義仁・橋本伸也監訳、昭和堂、2000 年）など。

＜指定討論者プロフィール＞

別府昭郎（べっぷ・あきろう）

明治大学文学部教授。博士（教育学）著書に『ドイツにおける大学教授の誕生』（創文社、1998 年）、『明治大学の誕生－創設の志と岸本辰雄－』（学文社、1998 年）、編著に『「大学」再考－概念の受容と展開－』（知泉書館、2011 年）共編著に『大学史をつくる－沿革史編纂必携－』（寺崎昌男・中野実と共編、東信堂、1999 年）など。

湯川次義（ゆかわ・つぎよし）

早稲田大学教育学部　教授。博士（教育学）。著書に『近代日本の女性と大学教育　―教育機会開放をめぐる歴史―』（不二出版　2003 年）、共著に『学校沿革史の研究　大学編 1』（寺崎昌男、西山伸と共編著、野間教育研究所、2013 年）、『学校沿革史の研究　総説』（寺崎昌男・西山伸・山谷幸司・米田俊彦らと共編著、2008 年）、『沼津市史　通史編　近代』・『同　現代』（中村政則編、沼津市教育委員会、2007、2008 年）、『沼津市史 史料編　近代１』『同　近代 2』『同　現代』（中村政則編、沼津市教育委員会、1997、2001、2004 年）など。

― 研 究 発 表 ―

10 月 13 日（日）　第 1 日　午前の部（9：00 / 9:30～12：00）

第 1 分科会会場　A 棟 6 階　617　教室

司会　：遠藤孝夫（岩手大学）　江頭智宏（名古屋大学）

〔1〕　9：30　1920 年代から 1930 年代ドイツにおける家族と教育
小玉　亮子（お茶の水女子大学）

〔2〕　10：00　20 世紀初頭ドイツにおける教育学の展開と保守革命論
清水　禎文（東北大学）

〔3〕　10：30　ドイツ教育学におけるコンピテンス概念の形成に関する一考察
津田　純子（新潟大学）

〔4〕11：00　1950 年前後オーストリアにおける体育館付設状況と体育の授業
―「自然体育」との関係を手がかりに―
鈴木　明哲（東京学芸大学）

〈総合討論〉　11：30～12：00

第 2 分科会会場　A 棟 6 階　616　教室

司会　：　和崎光太郎（京都市学校歴史博物館）　富岡勝(近畿大学)

〔5〕　9：30　「江戸時代がなかった町」の郷土史に関する研究と教育
―　1969～2007 年、長崎県諫早市　―
岡本　洋之（兵庫大学）

〔6〕　10：00　「長野県教員内地留学」制度の発足と信濃教育会
―1940 年代の動向を中心に―
小林彰彦（日本大学 ・ 院）

〔7〕　10：30　旧制中学校の課外活動における「校友」概念の形成
－1890 年代の長野県尋常中学校の校内雑誌『校友』を手がかりとして－
堤　ひろゆき（東京大学 ・ 院）

〔8〕　11：00　戦前期、岡山県会における諸議論と私設小学校教員養成所の発達
遠藤　健治（美作大学）

〈総合討論〉　11：30～12：00

（10 月 13 日午前）

第 3 分科会会場　A 棟 6 階　609　教室

司会　：広田照幸（日本大学）　菅原亮芳（高崎商科大学）

〔9〕　9：30　探検・冒険と明治末期の青少年育成　―村上濁浪と『探検世界』を中心に―
William R. Stevenson III（同志社大学）

〔10〕　10：00　明治憲法成立過程にみる井上毅の教育思想
柳田　文男（同志社大学・院）

〔11〕　10：30　喜田貞吉の歴史教育論
－「歴史地理」研究と「地方」への視点－
大野　智史（水戸第三高等学校）

〔12〕　11：00　帝国教育会結成直後の教員講習事業
白石　崇人（鳥取短期大学）

〈総合討論〉　11：30～12：00

第 4 分科会会場　A 棟 6 階　610　教室

司会　：井上美香子（九州大学）　吉川卓治（名古屋大学）

〔13〕　9：00　『講義録による学びと学習者の意識について　–学習者のライフヒストリーから—』
関本　仁（早稲田大学・院）

〔14〕　9：30　近代日本における大学予備教育の実態
—早稲田大学予科を中心として—
山本　剛（早稲田大学・院）

〔15〕　10：00　七年制高等学校案の展開過程よりうかがえる「高等普通教育」の変容とその意味
吉岡　三重子（お茶の水女子大学　・院）

〔16〕　10：30　新制大学発足時の「大学における教員養成」体制
－東北大学の教員審査書類の分析を中心に－
久恒　拓也（広島大学・院）

〔17〕　11：00　「近代」批判と大学自治論の形成
－南原繁における教会と大学の思想から－
船勢　肇（阪南大学）

〈総合討論〉　11：30～12：00

（10 月 13 日午前）

第５分科会会場　　Ａ棟６階　603　教室

司会　：　荒井明夫（大東文化大学）　新谷恭明（九州大学）

〔18〕 9:30　『佛國學制』と *Code Universitaire* の条文対照による実証的研究

―明治５年「学制」の基礎資料とされた『佛國學制』の原拠の解明―

栗村　清子（名古屋大学・院）

〔19〕 10：00　学制再編過程における中央と地方

―太政官・文部省・地方官における合意形成をめぐって―

湯川　文彦（日本学術振興会特別研究員）

〔20〕 10：30　文部省による海外留学生の管轄と「学制」

吉田　昌弘（富山国際大学）

〔21〕 11：00　1882 年の学事諮問会における府県答議

―第二次教育令下の地方教育施策の実態―

湯川　嘉津美（上智大学）

〈総合討論〉　11：30～12：00

10 月 14 日（月）　第 2 日　午前の部（9：00 / 9:30～12：00）

第 6 分科会会場　A 棟 6 階　617　教室

司会　：安原義仁（放送大学）　久保田圭司（岐阜工業高等専門学校）

〔22〕 9：00　トマス・クラップのカレッジ・カリキュラム論
—「精神の陶冶」と「精神の装備」の一致—
原　圭寛（慶應義塾大学・院）

〔23〕 09：30　J. E. W. ウォーリンの特殊学級教員養成論
—1930 年代デラウェア州を中心に—
吉井　涼（筑波大学・院）

〔24〕 10：00　戦間期ロンドンにおける就学支援
—児童の学校出席と支援を巡る担い手の動向—
内山　由理（首都大学東京・院）

〔25〕 10：30　A. C. マカーレンコにおける集団主義理論の形成と労働原理にかんする考察
桑原　清（北海道教育大学）

〈総合討論〉　11：00～11：30

第 7 分科会会場　A 棟 6 階　603　教室

司会　：佐藤淳介（大分県立芸術文化短期大学）　佐喜本愛（九州産業大学）

〔26〕 9：00　東京府私立小学校の「関西旅行」「参宮旅行」に関する一考察
橋本　萌（お茶の水女子大学　・院）

〔27〕 9：30　校内神祠の設置過程
田代　武博（西日本工業大学）

〔28〕 10：00　1910 年沖縄県佐敷小学校における御真影焼失火災後の校長本山萬吉
近藤　健一郎（北海道大学）

〔29〕 10：30　1930 年代における学校報徳社・児童常会の端緒
—富山県下指定教化村の報徳教育に着目して—
須田　将司（東洋大学）

〈総合討論〉　11：00～11：30

（10 月 14 日午前）

第８分科会会場　　Ａ棟６階　615　教室

司会　：竹本英代（福岡教育大学）　高木雅史（中央大学）

〔30〕　9：00　「東京市小学校ハーモニカ音楽指導研究会の設立(1937 年)とその音楽教育史上の位置」

樫下　達也（神戸大学・院）

〔31〕　9：30　西山哲治における子供の権利思想の研究

豊福　明子（九州大学・院）

〔32〕　10：00　昭和戦前期における峰地光重の郷土教育論

板橋　孝幸（奈良教育大学）

〔33〕　10：30　木下竹次による合科学習の構想と実践
—J. メリアムの *Child Life and the Curriculum* の影響を中心に—

杉村　美佳（上智大学短期大学部）

〈総合討論〉　11：00～11：30

第９分科会会場　　Ａ棟６階　616　教室

司会　：　木村政伸（新潟大学）　八鍬友広(東北大学)

〔34〕　9：30　幕末加賀藩下級武士の教育実態

江森　　一郎（金沢大学・名）

〔35〕　10：00　維新期の直轄県における郷学の展開に関する一考察
－東北諸県を事例として－

軽部　勝一郎（熊本学園大学）

〔36〕　10：30　明治・大正期宮崎県における私立学校の成立と展開
—向陽学舎を事例として—

竹村　茂紀（日向学院高等学校）

〈総合討論〉　11：00～11：30

10 月 14 日（月）　第 2 日　午後の部（12：30～15：00）

第 10 分科会会場　A 棟 6 階　603　教室

司会　：古沢常雄（法政大学・名）　藤勝宣（九州国際大学）

〔37〕12：30　匿名の『公教育論』*De l'éducation publique*（1762）に関する考察
—フランス 18 世紀後半における公教育思想の展開をめぐって—
越水　雄二（同志社大学）

〔38〕13：00　『イエズス会学事規程』にみる教育とハビトゥス形成
石田　治頼（筑波大学・院）

〔39〕13：30　ヨーロッパにおける教育概念の史的展開について
～ドイツ語圏における多様性とその分節化を中心に～
山内　芳文（東日本国際大学）

〔40〕14：00　近代教育思想「再読」論の検討
—　ラ・シャロッテの『国民教育論』を手がかりとして　—
金子　茂（九州大学・名）

〈総合討論〉　14：30～15：00

第 11 分科会会場　A 棟 6 階　617　教室

司会　：　堀浩太郎（熊本大学）清水康幸(青山学院女子短期大学)

〔41〕12：30　平野婦美子著『女教師の記録』（1940 年）の映画化作品における原作との異同の検討—エピソードの選択・配置、設定の変更、独自の展開の挿入—
岡崎　沙織（奈良女子大学　・　院）

〔42〕13：00　占領期朝鮮人学校教職員に対する適格審査
松下　佳弘（京都大学・聴）

〔43〕13：30　高度経済成長初期の郷土教育
—「不景気」の学び方に着目して—
須永　哲思（京都大学・院）

〔44〕14：00　近代内モンゴルにおけるモンゴル民族の女子教育について
—　カラチン右旗「毓正女学堂」を中心に　—
劉　迎春（京都大学・院）

〈総合討論〉　14：30～15：00

（１０月１４日午後）

第 12 分科会会場　　Ａ棟６階　615　教室

司会　：大谷　奨（筑波大学）　米田俊彦（お茶の水女子大学）

〔45〕　12：30　樺太医学専門学校の誕生

池田　裕子（稚内北星学園大学）

〔46〕　13：00　開拓使の「小学教則」・「変則小学教則」制定（1880 年）

井上　高聡（北海道大学・文書館）

〔47〕　13：30　北海道庁令「特別教育規程」（1908 年～1915 年）について
－資本主義社会確立期における教育「充実」「発展」の実態－

坂本　紀子（北海道教育大学）

〔48〕　14：00　「幻の建設」に込めた意思
－バチェラー八重子らによる「アイヌウタリー中等教育事業」－

小川　正人（北海道立アイヌ民族文化研究センター）

〈総合討論〉　14：30～15：00

第 13 分科会会場　　Ａ棟６階　616　教室

司会　：宇津野花陽（白鴎大学）　榑松かほる（桜美林大学）

〔49〕　12：30　（旧制）中学校における「実業」教育の実態史研究
―中学校第一種課程の動向を中心として―

松嶋　哲哉（日本大学・院）

〔50〕　13：00　旧制中学校補習科における実業科目の導入と挫折
―千葉中学校の実業補習科を通して―

吉野　剛弘（東京電機大学）

〔51〕　13：30　「文検図画科」試験問題の研究
―用器画の場合―

亀澤　朋恵（神戸大学・院）

〔52〕　14：00　手工科教育の充実期における「文検」手工科の内容と特徴

疋田　祥人（大阪工業大学）

〈総合討論〉　14：30～15：00

― コロキウム ―

10 月 14 日（月）　第 2 日　15：10～17：30

コロキウム 1 会場　　A 棟 6 階　616　教室

「東京教育大学における日本教育史研究の系譜―民衆教育史への視座―」

オルガナイザー　逸見　勝亮（北海道大学名誉教授、北海道大学大学文書館研究員）
報告者　森川　輝紀（福山市立大学）
「東京教育大学における日本教育史研究の系譜 ―唐澤研究室私記― 」
指定討論者　花井　信（常葉大学）
八鍬　友広（東北大学）

設定趣旨：

◇研究の達成と研究の系譜とを重ねて把握するのは、研究者に必須の教養の一つである。

◇石島庸男「西讃農民蜂起と小学校毀焼事件」（鹿野政直・高木俊輔編『維新変革における在村的諸潮流』三一書房、1972 年）を読んだとき、日本史研究と呼応しながら教育事象を剔出した手練に衝撃を受けた。1973 年のことである。石島庸夫の仕事に惹かれて、入江宏・森川輝紀・花井信の仕事は熟読せねばと心して繙いた。彼らは東京教育大学唐澤富太郎研究室の「出」である。彼らの仕事を「東京教育大学の日本教育史研究の系譜」として、敢えて「ひとくくり」にして、「民衆教育史への視座」と呼ぶことは、的外れではあるまい。とすれば、石島庸夫に連なる八鍬友広をここに配するのは自然である。

◇僕の意見では、彼らの仕事はいずれも日本教育史研究の「基準」であり、分野・関心を越えた必読文献である。巧まずして獲得あるいは到達した「民衆教育」なる視座は、唐澤富太郎の「最良の資質」を吸収した結果なのか、それともアンチテーゼを模索した結果なのか、瞠目させられる高い達成をもたらした「学的気風」を僕は知りたい。

◇A4 判用紙で 12 枚におよぶ森川輝紀報告の概要は以下のようである。

Ⅰ．唐澤教育史の前史

①1934 年に東京文理科大学に入学し、篠原助市下でナトルプ哲学、1937 年からは研究生として務台理作下でヘーゲル哲学を研究

② 1939 年～仏教哲学・仏教思想史を研究

③ 1949 年～東京教育大学日本教育史担当、1953 年『中世初期仏教教育思想の研究』で文学博士

Ⅱ．唐澤教育史学とは

①「生活する人間」の形成史

②「過去の否定的媒介」と人間の主体性

③世界史的立場――文化的類型・教育地理学――

④実物資料による教育史

⑤実感としての「事実」の教育史的究明

Ⅲ. 唐澤研究室の系譜――聞き覚え――

①方法としての「薫陶」

②唐澤教育史とその後

③私の場合

◇花井信・八鍬友広両氏に、僕が依頼したのは「自在に」である。　〈へんみ　まさあき〉

― コロキウム ―

10 月 14 日（月）　第 2 日　15：10～17：30

コロキウム 2 会場　　A 棟 6 階　615　教室

「近代日本における教育情報回路と教育統制に関する総合的研究　(2)
―　教育情報回路の重層化　　1910―1920 年代　―」

オルガナイザー　梶山雅史（岐阜女子大学）
報　　告　　者　佐藤高樹（帝京大学）
「教師の教育研究活動の拡がりと地方教育会―東京府を事例に―」
須田将司　（東洋大学）
「大正期福島県全域における郡内方部会・郡市連合教育会の展開」

〈設定主旨〉

教育情報回路としての教育会の実態・構造・機能の解明を目指す。前年度に続き、第 9 回目のコロキウム企画であり、今回は、教育会の組織が多層化し、その機能が一段と多様化する 1910―20 年代にスポットをあてる。

大正時代の相対的にリベラルな社会的風潮を受け、郡市教育会を中心として大正自由教育が導入されるが、治安維持法公布、思想善導政策の強化、世相の急変とともに教育会も教化総動員運動の重要な組織として組み込まれることになる。教育会による教員に対する統制が浸透していくプロセス、その重層的メカニズムの解明に取り組みたい。

○佐藤報告

昨年の梶山報告を引き継ぎ、東京府における 1910－20 年代の教育会組織の重層化（もしくは系統化）の実相について分析を進める。この時期は、地域における教育会組織の活動が整備され、その裾野が郡市・区町村という下位レベルに拡大していく一方、教員会や教育研究会といったかたちで教師の教育研究活動の（自主的）組織化が同時進行していく、いわば教育会（から）の機能分化が進む時代でもある。

大正期新教育運動という同時代の特徴的な動向と重ね合わせてみるとき、その情報の浸透、もしくは統制に果たした教育会の機能はどのように評価しうるのか。同時期東京府下における教師の教育研究活動の展開を跡づけた先行研究を整理しつつ、新たに府下教育会の活動実態を掘り起こすことによって考察を試みたい。

○須田報告

『続・近代日本教育会史研究』所収の拙稿「大正期福島県における教育会活動の重層性」において、相馬郡教育会の「方部会」単位の教員研究会の活性化、「浜三郡連合教育会」単位の教育品展覧会の開始と県・郡視学の指導評価の存在を確認し、その背景に 正教員不足による代用・女性教員の増加とそれに伴う職能向上の要求、また新思潮の受容といった多様な課題が存在し、それゆえに教育会活動の重層性の強化が図られたのではないかとの考察をおこなった。

本報告では、前掲拙稿で十分に展開できなかった相馬郡以外の郡内方部会、県内四郡市連合教育会の分析を行い、全県的な視野での再検討を試みる。これら中間項の開催実態を捉えるのみならず、そこでの教育情報の質・内容にも可能な限り分析を加え、「教育情報回路」がいかなる要因や方向性をもって重層化の道を歩んだのか、再検討を試みたい。

― コロキウム ―

10 月 14 日（月）　第 2 日　15：10～17：30

コロキウム 3 会場　　A 棟 6 階　603　教室

教育のなかの宗教・古典・道徳
―ハプスブルク君主国の場合―

オルガナイザー　宮澤康人（東京大学・放送大学　名誉教授）
　　長谷部圭彦（駒澤大学等　非常勤講師）
司　会　者　磯貝真澄（京都外国語大学　嘱託研究員）
報　告　者　石井大輔（神戸大学　研究員）「イエズス会教育とエリート層の育成」
　　上村敏郎（獨協大学　専任講師）「啓蒙期の教育改革」
指定討論者　長谷部圭彦（駒澤大学等　非常勤講師）「ハプスブルクとオスマン」

<設定趣旨>

本コロキウムは、一昨年（第 55 回大会）のコロキウムを承けて、前近代における教育の中核をなすと考えられる宗教や古典や道徳は、一般に「近代的」とされる新しいタイプの学校において、いかなる機能を担っていたのか、あるいは担わされていたのかという問題を、言語的にも宗教的にも領域的にも多様な要素から構成されていたハプスブルク君主国を事例に、比較史的に検討しようとするものである。

ハプスブルク君主国では、プロテスタントの反乱が鎮圧された 1620 年以降、カトリシズムが国是となり、各領邦で再カトリック化が推進された。そのとき大きな役割を果したのがイエズス会である。とりわけ聖俗エリート層の育成は、古典語を中心とする人文主義的な教育の伝統に基づき、イエズス会主導で行われた。そしてこのようなイエズス会による教育が、様々な領邦からなるハプスブルク君主国の一体性を醸成したと言われている。本コロキウムでは、まず石井大輔氏による報告において、このようなイエズス会によるエリート教育を、リンツを事例に検討し、ハプスブルク君主国におけるイエズス会教育の影響について考察する。

18 世紀後半になると、ハプスブルク君主国はプロイセンとの二度にわたる戦争に敗北し、国家の立て直しが急務となった。近代的な国家を形成するために、あらゆる分野で改革が試みられたが、教育は最も重視された分野の一つであった。イエズス会主導の教育に代わる新たな臣民教育の必要性が、国家に認識されたのであった。上村敏郎氏による報告では、こうした時代状況のもとで推進されたフェルビガーによる教育改革や、その後のヨーゼフ 2 世の改革を概観し、ハプスブルク君主国における啓蒙専制と教育の問題を検討する。

両報告を承けて、長谷部圭彦会員は、ハプスブルク君主国と抜き差しならぬ関係にあり、しかも多様性という点で同国と並ぶ存在であったオスマン帝国を視野に入れたコメントを行う。その後、フロアを交えた討論を活発に行うことによって、前近代と近代の連続性、暗誦による古典の身体化、古典の宗教性、帝国的編成における教育の意義および教育の担い手といった問題を、比較史的・世界史的な観点から考えたい。

― コロキウム ―

10 月 14 日（月）　第 2 日　15：10～17：30

コロキウム 4　　A 棟 6 階　602　教室

新教育運動と幼児教育―日中の比較―

オルガナイザー　湯川　嘉津美（上智大学）
司　会　者　小玉　亮子（お茶の水女子大学）
報　告　者　一見　真理子（国立教育政策研究所）
「中国新教育運動における幼児教育改革 ―陳鶴琴の場合― 」
湯川　嘉津美（上智大学）
「日本における保育理論の構築と国民幼稚園論の展開 ―倉橋惣三の場合― 」

設定趣旨

従来、新教育運動と幼児教育というテーマで行われる研究は、アメリカの幼児教育改革に関する研究がほとんどであり、アジアを視野に入れて新教育運動と幼児教育の関連を問う研究は少ない。しかし、日本と中国では 1920～30 年代にかけて、欧米の新教育運動の影響を受けつつ、保育理論の構築や幼稚園カリキュラムの作成など、幼児教育改革が進められており、これによってその後の幼児教育の基盤が形成されたといっても過言ではない。そこで、本コロキウムでは倉橋惣三と陳鶴琴の二人の人物を取り上げ、日本と中国における幼児教育改革について、欧米の新教育運動の影響に着目しながら、比較検討を行う。各報告の要旨は以下の通りである。

一見報告では、中国において幼児教育の改革・刷新に邁進した陳鶴琴の 1920 年代から 40 年代までの足跡を追うこと通して、幼児教育改革の動向とその特質を明らかにする。20 世紀初頭の中国政府主導の教育近代化は明治日本の成功経験を効率よく摂取することから始まるが、幼児教育分野も例外ではなかった。欧米の新教育運動は、1920 年代に至って、おもにアメリカ留学帰国者を媒介として中国に波及する。報告では、陳鶴琴登場までの中国幼児教育前史、新教育運動下の幼児教育改革（発達研究からの出発、実験幼稚園の創設、課程研究～課程標準の制定へ、活教育理論とは何か）について取り上げる。

湯川報告では、1920 年代から 30 年代前半において、倉橋惣三がアメリカの新教育理論を受容して、幼児の生活を本位とする保育理論（誘導保育論）を構築し、幼稚園カリキュラム（系統的保育案）に具体化したこと、また、1930 年代後半から 1940 年代にかけて、ドイツの文化教育学に着目して「生活から文化へ」の発展性を考慮した保育論を展開し、それを国民幼稚園論に発展させたことなどを取り上げて、日本の幼児教育改革の動向と性格を明らかにする。

以上の報告をもとに、新教育運動と幼児教育という視角から、日本と中国の幼児教育改革について、参加者を交えて議論を行い、日中の幼児教育改革の特質とその歴史的意義について考察を深めることとしたい。